

# 宗教と科学

千 谷 七 郎

「宗教と科学」というようなテーマを揚げると、何を今更  
と思う人々も大勢いることだろうし、それと反対に、宗教と  
までは言わなくとも、何か宗教的なもの、或いは宗教心こそ  
科学の時代に必要とするのではないかと、日頃から思ってい  
る人も少なくはないであらう。事実、私自身或る雑誌社の企  
画になった同じテーマの座談会参加の案内を受けた折にも、  
この二つの感情が入り雑った。

コペルニクス（一四七三—一五四三）によって再確認され  
た地動説に対するガリレオ（一五六四—一六〇〇）の保証は  
カトリック教会から撤回を強制された。その少し前には、イ  
タリヤの哲学者ブルーノー（一五四八—一六〇〇）も新しい  
自然観を唱えたが、それは瀆神の罪を犯すものということ  
で、異端者として宗教裁判にかけられて焚刑に処せられると

いう悲劇もあった。それらは宗教改革の時代のカトリック教  
学護持の厳肅主義と、近代的な自由討究の学風との間に起っ  
た悲劇であるけれども、近代科学の力ある発展はかかる矛盾  
を剋服してとげられた、と言われて来た。そして、ダーウィ  
ンの『種の起源』（一八五九年）はほんの百年ばかり前のこ  
とであったが、その生存競争、適者生存による生物進化論は  
特に宗教家から激しい非難をうけ、神の創造による人間の神  
聖を冒瀆するという見地から排斥されたけれども、それらの  
人々は却って旧思想の人とされる状況で、謂わば宗教に対す  
る科学の勝利といったものが謳歌されているかのようであっ  
た。そして自然征服といった言葉も私どもに何らの疑問を抱  
かせなかった。今から半世紀前の私どもの小学校で学んだ  
「宗教と科学」との関係はその程度の知識ではなかったかと

思う。

そこで、「宗教と科学」というようなテーマになると、何を今更、という感情が最初に出て来て戸惑いを感じさせるのだろうが、併し、今日になって見れば、例えば「自然征服」などという言葉を臆面もなく公言する人はいつの間にかいなくなっていることに気がついてみると、人間の感じ方が大きく変化して来ていることが思われるのではなからうか。ヒマラヤ征服といったような呆けた言葉がまだ聞かれないでもないが、それは自然征服思想時代の残余であらう。既に一九七二年は世界自然保護の年でもあった。人々はやっと科学の限界し、それに危険性をも知って来た。そういう人々の意向の大きな変化を背景にして、宗教と科学の問題が再び少しずつ意味をもつようになって来ているのではなからうか。ルネッサンスから始まった教会と科学との矛盾も、もっと深い観点からの再検討を待つものではなからうかとすら思われる。

例えば、現代人の特色とする「進歩」思想に大きな影響を与えたと言われるダーウィンの進化論についても、教会的見地とは全く別箇に批判されて久しいけれども、それに注目している人は少ない。「自然界には『生存競争(struggle for existence) 註・正確に訳せば自己保存のための戦いであらう。』

for lifeではないから)』などは全くない。ただ生命を守ることに由来する戦いがあるだけである。多くの昆虫は交尾の過程が終わると死んで行くのを見ても分る通り、自然は自己保存に重きを置いていない。ただ生命の波が類似の形態を繰り返し展開して行くだけである。一匹の動物が他の動物を追っかけて殺すのは空腹からの必要がそうさせているのであって、利欲や野心、権勢欲からしているのでない。ここに、どんな進化論も橋渡しできない深淵に出会うことになる。種は決して他種によって絶滅させられることはない。何故なら、一方が過剰になれば必ず餌物が甚だ乏しくなることによって食料が失われるという報いが来るからである。種の交替変移は巨大な時の間に地球的な諸理由から行われたのであって、亜種の不断增加をもたらしした。わずかの人間世代の間に見られた幾百もの種の滅亡は、たとえば恐竜やマンモスなどの絶滅とは到底比べられるものではない」(L・クラークス『人間と大地』一九一三年)。ダーウィンが自分でも気がつかないで奉じている形而上学はルネッサンス以来殆ど独裁的となっていた「合理主義」であって、これは世界推移を推進させる諸勢力は、外ならぬ或る隠れた功利主義者の意識からか、さもなければそれと全く同じ態度をとる「自然」から導き出

せると考えていたことであつた。ダーウィンの動物に寄せる温い思いやり、秀れた観察力、慎重さ、徹底性、たゆむことのない熱心さと調和している共感の人格を以てしても、時代精神の支配を免れることの困難な好箇の一例であろう。ダーウィンの広大な業績も同時に殆ど前世紀後半を含むほどの時代全体の視野狭窄を来すことに決定的な寄与をしている。そもそも科学とはそういうものなのだろうか。

ところで、ゲーテは一つの覚書きのようなものを残している。「宗教と文芸と学術とは、崇める、創造する、観得する」という三つの人間の欲求を充たすものである。この三つは途中ではいつも離れ離れになっているけれども、初めと終りとは一つものである」と書き、更にそれをしばって次の詩句にまとめている。

学術と文芸をもつ者は、宗教ももつ。

二つをもっていない人でも、宗教はもつだろう。

右の覚書きと詩句で知られることは、人間を人間らしくする根本は宗教であること、そしてその宗教というのは、ゲーテにあっては崇める心(anbeten)・畏敬心(Ehrfurcht)・敬虔(fromm sein)という言葉で述べられている。『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の中で三人衆に語らせている。「ど

んな宗教でも、恐怖から発したものは私たちの間では認められていません。……恐怖心を抱くことは容易ですが苦しく、畏敬の念を抱くことは困難ですが快いことです。人間はなかなか畏敬する決心をしたがりません、いや、むしろ決して決心しないといったほうがいいかもしれません。しかし畏敬は一つのより、高尚な心ばえであって、人間の天性に加えられるければならぬものであり、……ここにあらゆる真正な宗教の尊厳があります」と。

この畏敬について、吾が本居宣長は「凡て迦微とは、古御典等にも見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐ス御霊をも申し、又人はさらに云はず、鳥獸草木のたぐい海山など、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳ありて、可畏キ物を迦微とは云なり。……」(古事記伝三六卷、小林秀雄『本居宣長 四五二頁』)と述べている。一見すれば、謂わゆる民族宗教を述べているようであるけれども、このカミを、ヘラクレイトスの「万物は生きる」という意味での「生」に置き換えて「生に寄せる畏敬、或いは敬虔」とするならば、最も厳肅な普遍的宗教心とすることができ得るであろう。但し、このような敬虔は、特に現代にあっては「一つのより、高尚な心ばえであって、人間の天性に加えられる

ればならぬもので」あろう。

さて、このような宗教心から遊離する科学の危険をゲーテは危惧し、憂慮していたことが明らかに知れるのであるが、それは既にルネッサンスにおける教会と科学との矛盾として露出していた。それは双方に不備を蔵していたことに由来するのであるが、このことはルネッサンの時代が宗教改革の時代と一致すること、そして科学は現実全体の聯関、脈絡の観得から離れて、質と量の分裂をもたらし始めていたことから容易に見られるところである。「ちなみにエネルギー(力)保存の法則といったような物理学の量法則を生命の問題に適用するなどということは全く精神から見放されたものである。今だにレトリク(蒸留器)からどんな生命細胞も造られはしない。もしそれが成し遂げられるとしたら、それは『力』の結合からではなくて、化学物質もまた既に生命とは不断の自己更新の性能をもつ形態である。もし種を絶滅して、この形態を抹消してしまえば、たといエネルギーはいうが如く保存されても、地上には永遠にその種を見ることはない」(L・クラークス)。

後にカントが諸科学の価値は、それらがどれほど数学を含

んでいるかということを決められる、と述べた新たな自然科学はルネッサンスから始まって、ニュートン(一六四三—一七二七)を経て今日に至ったのであるが、今はこれを詳しく辿る余白がない。ただ人間の「自然征服」というような旧約聖書(創世記一・二六)以来の伝統と言われる形而上学的所信も既に勢力を失墜して、むしろ人々は戸惑いを感じている今日でもあるので、もう一度私ども人間自身を省察する枝折りにもと、吾が元禄俳人宝井其角が元禄十六年の墓参の帰途泉岳寺に立ち寄って、俳諧の弟子子葉(大高源吾)、春帆(富森助衛門)、竹平(神崎与五郎)を含む赤穂義士の墓に門外から手向け草として捧げた言葉を抄出して結びたい。

「凡人間のあだなることを観すれば、我々が腹の中に尿と慾との外の物なし。五輪五臓は人の体、何のへだてのあるべき、と、彼傀儡にうたひけん。公卿、大夫、士、庶人、士民、百姓、工商、乃至三界万霊等、この屎慾をおはんとて、冠を正し、太刀はき、上下を着て馬にめす。法衣、法服の其品まちまちやといへども生前の蝸名蠅利なり。

たちねに借錢乞はなかりけり」

この句はこの日、墓前で母を偲んで成ったものであろう。